

妖怪年代記

泉鏡花

青空文庫

予が寄宿生となりて松川私塾に入りたりしは、英語を学ばむためにあらず、数学を修めむためにあらず、なほ漢籍を学ばむことにもあらで、他に密に期することのありけるなり。

加州金沢市古寺町に隣無き一字の大廈は、松山某が、英、漢、数学の塾舎となれり。旧は旗野と謂へりし千石取の館にして、邸内に三件の不思議あり、血天井、不開室、庭の竹藪是なり。

事の原由を尋ぬるに、旗野の先住に、何某とかや謂ひし武士のありけるが、過まてることありて改易となり、邸を追はれて国境よりぞ放たれし。其室は当時家中に聞えし美人なりしが、女心の思詰めて一途に家を明渡すが口惜く、我は永世此処に留まりて、外へは出でじと、其居間に閉籠り、内より鎖を下せし後は、如何かしけむ、影も形も見えずなりき。

其後旗野は此家に住ひつ。先住の室が自ら其身を封じたる一室は、不開室と称へて、

開くことを許さず、はた覗くことをも禁じたりけり。

然るからに執念の留まれるゆゑにや、常には然せる怪無きも、後住なる旗野の家に吉事ある毎に、啾々たる婦人の泣声、不開室の内に聞えて、不祥ある時は、さも心地好げに笑ひしとかや。

旗野に一人の妾あり。名を村といひて寵愛限無かりき。一年夏の半、驟雨後の月影冴かに照して、北向の庭なる竹藪に名残の雫、白玉のそよ吹く風に溢るゝ風情、またあるまじき観なりければ、旗野は村に酌を取らして、夜更るを覚えざりき。

お村も少しくなる口なるに、其夜は心爽ぎ、興も亦深かりければ、飲過して太く酔ひぬ。人静まりて月の色の物凄くなりける頃、漸く盃を納めしが、臥戸に入るに先立ちて、お村は厠に上らむとて、腰元に扶けられて廊下伝ひに彼不開室の前を過ぎけるが、酔心地の胆太く、ほとくと板戸を敲き、「この執念深き奥方、何とて今宵に泣きたまはざる」と打笑ひけるほどこそあれ、生温き風一陣吹出で、腰元の携へたる手燭を消したり。何物にか驚かされけむ、お村は一声きやつと叫びて、右側なる部屋の障子を外して僵れ入ると共に、氣を失ひてぞ伏したりける。腰元は驚き恐れつゝ件の部屋を覗けば、内には暗く行灯点りて、お村は脛も露に横はれる傍に、一人の男ありて正体も無く眠れるは、

蓋此家の用人なるが、先刻酒席に一座して、酔過して寝ねたるなれば、今お村が僵れ込
 みて、己が傍に氣を失ひ枕をならべて伏したりとも、心着かざる状になむ。此腰元は春
 といひて、もとお村とは朋輩なりしに、お村は寵を得てお部屋と成済し、常に頤以て召
 使はるゝを口惜くてありけるにぞ、今斯く偶然に枕を並べたる二人が態を見るより、悪
 心むらむらと起り、介抱もせず、呼びも活けで、故と灯火を微にし、「かくては誰が眼
 にも……」と北叟笑みつゝ、忍やかに立出で、主人の閨に走行きて、酔臥したるを揺覚
 まし、「お村殿には御用人何某と人目を忍ばれ候」と欺きければ、短慮無謀の平素を、酒
 に弥暴く、怒氣烈火の如く心頭に発して、岸破と蹴起き、枕刀押取りて、一文字に
 馳出で、障子を蹴放して驀地に躍込めば、人畜相戯れて形の如き不体裁。前
 後の分別に違無く、用人の素頭、拔手も見せず、ころりと落しぬ。

二

旗野の主人は血刀提げ、「やをれ婦人、疾く覚めよ」とお村の肋を蹴返せしが、活の
 法にや合ひけむ、うむと一声呼吸出でて、あれと驚き起返る。

主人はハツタと睨ねめつ附け、「畜生よ、男は一刀に斬棄きりすてたれど、汝おのれには未だ為なむやうあり」と罵ののり狂あきひ、呆あきれ惑まどふお村の黒髪くろかみを把とりて、廊下りやうかを引摺ひきずり縁側えんがわに連行つれゆきて、有無うむを謂いはせず衣服いふくを剥取はぎとり、腰こしに纏まとへる布ふばかりを許ゆるして、手足てあしを堅いく縛しばめけり。

お村は夢の心地ながら、痛いたさ、苦くるしさ、恥はづかしさに、涙なみだに咽むせび、声こゑを震ふるはせ、「こは殿にものはに狂くるはせ給たまふか、何なに故ゆゑありての御折檻ごせつかんぞ」と繰返くりかへしては聞きこゆれども、此方こなたは憤い懣りに逆上さかして、お村の言ことばも耳みみにも入いらず、無二無三むにむさんに哮たけりた立たちち、お春はるを召よして酒さけを取寄とせ、己おのが両手りやうてに滴したらしては、お村の腹はらに塗ぬり、背せに塗ぬり、全身余みづかさず酒さけ漬ひたしにして、其そのまゝ庭つぎに突出つぎだし、竹藪たけくさの中に投入いれて、虫責むしぜめにこそしたりけれ。

深夜しんやの出来事できごとなりしかば、内の者うちものども皆眠みりて知しれるは絶たえてあらざりき。「かまへて人に語かたるべからず。執成とりなし立たてせば面倒めんどうなり」と主人しゅじんはお春はるを警いめぬ。お村が苦痛くるうはいかばかりなりけむ、「あら苦くるし、堪たへ難がたや、あれよく」と叫こゝろびたりしが、次第しだいにももの得え謂いはずなりて、夜も明方あけあたに到いたりては、唯泣ただく声こゑの聞きこえしのみ、されば家内うちうちの誰たれ彼かれは藪くさの中うちとは心着こゝろづかで、彼かの不あかずのまの怪異かいぎとばかり想おもひなし、且恐かつれ且怪あやしみながら、元来もとより泣声なきこゑある時は、目出度めでたきことの兆候きざしなり、と言いひ伝つたへたりければ、「いづれも吉兆きさうに候さうひなむ」と主人しゅじんを祝いわせしぞ愚おろかなりける。午前ひる少すこしく前のほど、用人いひやくの死骸みいだを発見みいだしたる者ものありて、

上を下へとかへせしが、主人は少しも騒ぐ色なく、「手討にしたり」とばかりにて、手てつゞ続つぎを経てこと果てぬ。お村は昨夜ゆうべの夜半より、藪まなかの真中うちこに打込まれ、身動きだにもならざるに、酒の香かを慕したひて寄来よりくる蚊かの群は謂いわふも更さらなり、何十年を経たりけむ、天日てんじつを蔽おひおひかく隠かくして昼猶なほ聞きこき大藪おほくさなれば、湿地に生ずる虫どもの、幾万とも知れず群むらり出でて、手足に取着はき、這はい懸かり、顔とも謂いわはず、胸とも謂いわはず、むずく往来しつ、肌を嘗なめられ、血を吸はるゝ苦痛は云ふべくもあらざれば、悶もだえ苦み、泣き叫びて、死なれぬ業わざを歎なげきけるが、漸次しだいに精尽せいじつき、根疲こんれて、氣の遠くなり行くにぞ、渠かれが最も忌嫌いみきらへる蛇へびの蛭むしも知らざりしは、せめてもの僥倖げうかうなり、されば玉たまの緒をの絶えしにあらねば、現うつに号がうき泣ふする糸より細き婦人をんなの声は、終日ひねもす休やむ間ひまなかりしとぞ。

其日も暮れ、夜よに入りて四辺あたりの静しづかになるにつれ、お村が悲喚ひくわんの声こゑ湧きえて眠がたり難がたきに、旗野の主人も堪たまり兼ね、「あら煩惱うろさし、いで息の根を止めむず」と藪はの中うちに走はしり入いり、半死半生の婦人をんなを引出ひきいだせば、総身そうしん赤く腫はれたるに、紫斑しはん々の痕あとを印し、眼も中あてられぬ惨状ありさまなり。

かくても未だ怒いまいかりは解とけず、お村の後手うしろでに縛くりたる繩はしの端はしを承塵なげしに潜くぐらせ、天井より釣つり下さげて、一太刀斬きり附つくれば、お村ははつと我に返りて、「殿、覚えておはせ、御身おんみが命を

取らむまで、妾は死なじ」と謂はせも果てず、はたと首を討落せば、骸は中心を失ひて、真逆様になりけるにぞ、踵を天井に着けたりしが、血汐は先刻脛を伝ひて足の裏を染めたれば、其が天井に着くとともに、怨恨の血判二つをぞ捺したりける。此一念の遺物拭ふに消えず、今に伝へて血天井と謂ふ。

人を殺すにも法こそあれ、旗野がお村を屠りし如きは、実に惨中の惨なるものなり。家に仕ふる者ども、其物音に駈附けしも、主人が血相に恐をなして、留めむとする者無く、遠巻にして打騒ぎしのみ。殺尽せしお村の死骸は、竹藪の中に埋棄てて、跡もせざりけり。

三

はじめお村を讒ししお春は、素知らぬ顔にもてなしつゝ、此家に勤め続けた。人には奇癖のあるものにて、此婦人太く蜘蛛を恐れ、蜘蛛といふ名を聞きてだに、絶叫するほどなりければ、況して其物を見る時は、顔の色さへ蒼ざめて死せるが如くなりしとかや。お村が虐殺に遭ひしより、七々日にあたる夜半なりき。お春は厠に起出でつ、帰に

は寢惚^{ねぼ}けたる眼の戸惑^{とまど}ひして、彼血天井の部屋へ入りにき。それと遽^{にはか}に心着^{こころづ}けば、天窓^{あたま}より爪先まで氷を浴ぶる心地して、齒の根も合はず戦^{わな}きつゝ、不気味に堪^たへぬ顔を擡^あげて、手燭^{ぼんぼり}の影幽^{かすか}に血の足痕^{あしあと}を仰^{あふぎみ}見る時しも、天井より糸を引きて一^{いつびき}足の蜘蛛垂^{たれさが}下り、お春の頬に取^{とり}着^つくにぞ、あと叫^{たち}びて立竦^{たすく}める、咽喉^{のんど}を伝ひ胸に入り、腹より背^{せな}に這廻^{はひまは}れば、声をも得^え立てず身を悶^{もだ}え虚空^{こくう}を掴^{つか}みて苦^{くる}みしが、はたと僵^{たふ}れて前後を失ひけり。夜^よ更^{ふけ}の事とて誰^{たれ}も知らず、朝^{あした}になりて見^み着^つけたる、お春の身体^{からだ}は冷たかりき、蜘蛛の這^はへりし跡やらむ、縄^{くび}にて縊^{くび}りし如く青き糸^{すぢ}をぞ画^{えが}きし。

眼^{まのあたり} 前^{まへ} お春が最期^{さいご}を見てしより、旗野の神経^{くるひだ}狂^{くる}出し、あらぬことのみ口走^{くち}りて、一^ひ月^{つき}余^{あまり}も悩^{なや}みけるが、一夜^{あるよ}月の明^{あきら}かなりしに、外^{とのかた}方に何やらむ姿ありて、旗野をおびき出^{いだ}すが如く、主人^{あるじ}は居室^{るま}を迷^{まよ}ひ出^でて、漫^{そぞ}ろに庭を徜徉^{さまよ}ひしが、恐^{おそ}しき声^{こゝろ}を発^はして、おのれ！ といひさま刀を抜き、竹藪^{をとどろ}に躍^{をどり}菟^うりて、えいと殺^{ころ}ぎたる竹の切^{きり}口^{くち}、斜^なに尖^{めとが}れる切^{きつ}先に転^{まろ}べる胸を貫^くきて、其場に命を落せしとぞ。仏家^{ぶつ}の因果^{ぶつ}は是^{これ}ならむかし。

旗野^{すざい}の主人^{しゅじん}果^はてて後^{のち}、代^よを襲^つぐ子^ことても無^なかりければ、やがて其家^{そのへ}は断絶^{たえ}にけり。数歳^{すざい}の星霜^{せいそう}を経て、今松川の塾^{しやく}となれるまで、種^{さま}々^{／＼}人の住^す替^かりしが、一^{ひと}月^{つき}居^ゐしは皆無^{みな}にて、多^{おほ}きも半月^{はんげつ}を過^へぐるは無^なし。甚^{はなは}だしきに到^{いた}りては、一夜^{ひとよ}を超^こえて引越^{ひこ}せしも

あり。松川^{かしこ}彼^{すま}処^かに住^{すま}ひてより、別^{かは}に變^{かは}りしこともなく、一二月^{ふたつき}余^{おちつ}も落^{おちつ}着^{おちつ}けるは、いと珍^{めづ}しきことなりと、近^{きんりん}隣^{りん}の人は噂^{うはさ}せり。さりながらはじめの内^{うち}は十幾^{じふいくた}人の塾^{じやく}生^{せい}ありて、教^け場^{うちやういた}太^{ふた}く賑^{なり}ひしも、二^{ふた}人^{たり}三^{さん}人と去^{はて}りて、果^{はて}は一^{いち}人^{にん}もあらずなりて、後^{のち}にはたゞ昼^{ひる}の間^{うち}通^す学^{がく}生^{せい}の来^きるのみにて、塾^{じやく}生^{せい}は我^{われ}一^{いち}人^{にん}なりき。

前^す段^{だん}既^{すで}に説^{せつ}けるが如^{ごと}く、予^よが此^こ塾^{じやく}に入^いりたりしは、学^{がく}問^{もん}すべきためにはあらで、いかなる不^ふ思^し議^ぎのあらむかを窺^{うかが}ひ見^みむと思^{おも}ひしなり。我^{われ}には許^せせ。性^{せい}として奇^き怪^{かい}なる事^{こと}とし謂^いへば、見^みたさ、聞^ききたさに堪^たへざれども、固^{もと}より頼^{たの}む腕^{うで}力^{りき}ありて、妖^{えう}怪^{かい}を退^{たい}治^ちせむとにはあらず、胸^{たけ}に蓄^{たく}ふる学^{がく}識^{しき}ありて、怪^{かい}異^いを研^{けん}究^{きう}せむともあらず。俗^{ぞく}に恐^{おそ}いもの見^みたさといふ好^{この}事^じ心^{しん}のみなり。

さて松川^{まつがわ}に入^い塾^{じやく}して、直^{ただ}ちに不^ふ開^{かい}室^{しつ}を探^{たづ}検^{けん}せん^せとせしが、不^ふ開^{かい}室^{しつ}は密^{みつ}閉^{へい}したるが上^{うへ}に板^{いた}戸^こを釘^{くぎ}付^{つけ}にしたれば開^{ひら}くこと無し。僅^{わずか}に板^{いた}戸^この隙^{ひま}間^{かん}より内^{うち}の模^も様^{よう}を窺^{うかが}ふに、畳^{たた}二^に三^{さん}十^{じゅう}も敷^敷かるべく、柱^{はしら}は参^{さん}差^しと立^{たち}ならべり。日^ひ中^{ちゆう}なれども暗^{あん}澹^{たん}として日^ひの光^か幽^{ゆう}に、陰^{かげ}々^さたる中^{うち}に異^い形^{ぎやう}なる雨^{あま}漏^もの壁^{かべ}に染^そみたるが仄^ほ見^みえて、鬼^{おに}氣^き人^{にん}に逼^{せま}るの感^{かん}あり。即^{すなは}ち隙^{すき}見^みしたる眼^めの無^む事^じなるを取^と柄^へにして、何^{なん}等^{とう}の発^{はつ}見^{けん}せし事^{こと}なく、踵^{きびす}を返^{かへ}して血^ち天^{てん}井^{けい}を見る。こゝも用^{もち}無^むき部^ぶ屋^やなれば、掃^{はき}除^ぞせしこともあらずと見^みえて、塵^{ちりほこり}埃^い床^どを埋^{うめ}め、鼠^{ねずみ}の糞^{ふん}梁^{りやう}に堆^{たい}く、

障子襖も煤果てたり。そこぞと思ふ天井も、一面に黒み渡りて、年経る血の痕の何処か
 弁じがたし、更科の月四角でもなかりけり、名所多くは失望の種となる。されどなほ余
 すところの竹藪あり、蓋し土地の人は八幡に比し、恐れて奥を探る者無く、見るから物
 凄き白日闇の別天地、お村の死骸も其処に埋めつと聞くほどに、うかとは足を入難
 し、予は先づ支度に取り懸れり。

誰にか棄てられけむ、一頭流浪の犬の、予が入塾の初より、数々庭前に入来り、
 そこはかと餌をるあり。予は少しく思ふよしあれば、其頭を撫で、背を摩りなどして馴
 近け、賄の幾分を割きて与ふること兩三日、早くも我に臣事して、犬は命令を聞
 くべくなれり。

四

水曜日は諸学校に授業あるに關らず、私塾大抵は休暇なり。予は閑に乘じ、庭に出で
 て彼の竹藪に赴けり。然るに予てより斥候の用に充てむため馴し置きたる犬の此時折
 よく来りければ、彼を真先に立たしめて予は大胆にも藪に入れり。行くこと未だ幾干

ならず、予に先むじて駈込みたる犬は奥深く進みて見えなくなりしが、あなやなにごと 呀何事の起りしぞ、にうごいつせい 乳虎一声高く吠えて藪中俄に物騒がし、さうちにはかもさわ 其響に動揺せる満藪の竹葉相触れてざわ／＼と音したり。予はひやりとして立停まりぬ。たちど 稍ありて犬は奥より駈来り、予が立てる前を閃過して藪の外へ飛出だせり。せんくわ おもてとびい 其劍幕に驚きまどひて予も慌たゞしく逃出だし、にげい とみ 只見れば犬は何やらむ口に銜へて躍り狂ふ、こは怪し口に銜へたるは一尾の魚なり、そも何ぞと見むと欲して近寄れば、獲物を奪ふと思ひけむ、犬は逸散に逃去りぬ。ばうぜん 予は茫然として立ちたりけるが、想ふに藪の中に住居へるは、狐か狸か其類ならむ。かやつ おびや きんりん めすみきた おひる 渠奴犬の為に劫かされ、近鄰より盗来れる午飯を奪はれしに極まりたり、然らば何ほどのことやある、と爰に勇氣を回復して再び藪に侵入せり。

でふすぬじまん 晝翠滋蔓繁茂せる、竹と竹との隙間を行くは、篠突く雨の間を潜りて濡れまじとするの難きに肖たり。かた に 進退頗る困難なるに、払ふ物無き蜘蛛の巣は、前途を羅して煙の如し。くちをほめ とかげ 蛇も閃きぬ、蜥蜴も見えぬ、其他の湿虫群をなして、縦横交馳し奔走せる状、一眼見るだに胸悪きに、手足を縛され衣服を剥がれ若き婦人の肥肉を酒塩に味付けられて、虫の膳部に佳肴となりしお村が當時を憶遣りて、予は思はずも慄然たり。

こゝはや藪の中央ならむと旧来し方を振返れば、真昼は藪に寸断されて点々星に髣髴

たり。なほ何程の奥やあると、及び腰に前途を視む。時其時、玄々不可思議奇絶怪
 絶、紅きものちらりと見えて、背向の婦人一人、我を去る十歩の内に、立ちしは夢
 か、幻か、我はた現心になりて思はず一步引退れる、とたんに此方を振返りし、
 眼口鼻眉如何で見分けむ、唯、丸顔の真白き輪郭ぬつと出でしと覚えしまで、予が絶叫せ
 る声は聞えて婦人が言は耳に入りぬ、「こや人に説ふ勿れ、妾が此処にあることを」一種
 異様の語気音調、耳朶にぶんと響き、脳にぐわらぐわと浸み渡れば、眼眩み、心消え、
 氣も空になり足漾ひ、魂ふらくと拔出でて藻脱となりし五尺の殻の縁側まで逃げたるは、
 一秒を経ざる瞬間なりき。腋下に颯と冷汗流れて、襦袢の背はしと濡れたり。馳せて
 書齋に引籠り机に身をば投懸けてほとと吐く息太く長く、多時觀念の眼を閉ぢしが、
 「さても見まじきものを見たり」と声を発して呟きける。「忍ぶれど色に出にけり我恋は」
 と謂ひしは粹なる物思ひ、予はまた野暮なる物思に臆病の色類に出でて蒼くなりつゝ結
 ばれ返るを、物や思ふと松川はじめ通学生等に問はるゝ度に、口の端むずゝするまで言
 出だしたさに堪ざれども、怪しき婦人が予を戒め、人に勿謂ひそと謂へりしが耳許に残
 り居りて、語出でむと欲する都度、おのれ忘れしか、秘密を漏らさば、活けては置かじ
 と囁く様にて、心済まねば謂ひも出でず、もしそれ胸中の疑碓を吐きて智識の教を請け

むには、胸襟きようきん乃ち春開はるけて臆病疾とみに癒えむと思へど、無形の猿轡さるぐつわを食はまされて腹

のふくるゝ苦しさよ、斯かくて幽玄の裡うちに数日すじつを閲けみせり。

一夕いつせき、松川の誕辰たんしんなりとて奥座敷に予を招き、杯盤はいばんを排し酒肴しゅかうを薦すすむ、献酬けんしゅう

数回すくわい予は酒といふ大胆者だいたんものに、幾分の力を得て積日せきじつの屈託くつたく稍散やじぬ。談話だんわの次手ついでに松

川が塾の荒涼たるを歎なげちしより、予は前日敷けんを檢けんせし一切いっさいを物語らむと、「実は……」

と僅わずかに言懸いひかける、正まさに其時、啾々しゅうしゅうたる女の泣声なきごえ、針の穴をも通らむず糸より細く聞え

にき。予は其それを聞くと整ひとしく口をつぐみて悄気しよげ返れば、春雨しゆんう恰あたも窓外に囁ささき至る、瀟せ

々うくの音に和し、長吁ちやうう短歎たんたん絶えてまた続く、婦人の泣音きふお怪あやしむに堪へたり。

五

「あれは何が泣くのでせう」と松川に問へば苦い顔して、談話はなしを傍わきへそらしたるにぞ推おし
ては問はで黙して休やめり。ために折角せつかくの酔よひは醒さめたれども、酔よひうて席に堪たへずといひな
し、予は寢室しりぞに退しりぞきつ。思へば好事よきことには泣くとぞ謂いふなる密閉室あかすのまの一件が、今宵たんし誕たんし
辰しんの祝宴しりぞに悠々いよく歡くわんを尽つくすを嫉ねたみ、不快なる声を発はして其快樂そのを乱せるならむか、あは

れ忌むべしと夜着を被りぬ。眼は眠れども神は覺めたり。

寢られぬまゝに夜は更けぬ。時計一点を聞きて後、漸く少しく眠氣ざし、精神朦々と
して我我を弁ぜず、所謂無現の境にあり。時に予が寝ねたる室の襖の、スツとばかり
に聞く音せり。否唯音のしなりと思へるのみ、別に誰そやと問ひもせず、はた起直りて
見むともせず、うつら／＼となし居れり。然るにまた晝を摺来る聲音聞えて、物あり、
予が枕頭に近寄る氣勢す、はてなと思ふ内に引返せり。少時してまた来る、再び引
返せり、三たびせり。

此に於て予は猛然と心覺めて、寢返りしつゝ眼を睜き、不図一見して蒼くなりぬ。予
は殆ど絶せむとせり、そも何者の見えしとするぞ、雪もて築ける裸体の婦人、あるが如く
無きが如き灯の蔭に朦朧と乳房のあたりほの見えて描ける如くイめり。

予は叫ばむとするに声出でず、蹶起きて逃げむと急るに、磐石一座夜着を圧して、
身動きさへも得ならねば、我あることを氣取らるまじと、愚や一縷の鼻息だもせず、心中
に仏の御名を唱へながら、戦く手足は夜着を煽りて、波の如くに揺らめいたり。

婦人は予を凝視むるやらむ、一種の電氣を身体に感じて一際毛穴の弥立てる時、彼は
得もいはれぬ声を以て「藪にて見しは此人なり、テモ暖かに寝たる事よ」と呟けるが、

まぎ／＼と聞ゆるにぞ、気も魂も身に添はで、予は一竦に縮みたり。

斯くて婦人が無体にも予が寝し衾をかくげつゝ、衝と身を入るゝに絶叫して、護謨球の如く飛上り、室の外に転出でて畢生の力を籠め、艶魔を封ずるかの如く、襖を圧へて立ちけるまでは、自分なせし業とは思はず、祈念を凝せる神仏がしかなさしめしを信ずるなり。

寒さは寒し恐しさにがた／＼震少しも止まず、遂に東雲まで立竦みつ、四辺のしらむに心を安んじ、圧へたる戸を引開くれば、臥戸には藻脱の殻のみ残りて我も婦人も見えざりけり。其夜の感情、よく筆に写すを得ず、いかむとなれば予は余りの恐しさに前後忘却したればなり。

然らでも前日の竹藪以来、怖気の附きたる我なるに、昨夜の怪異に胆を消し、もはや斯塾に堪らずなりぬ。其日の中に逃歸らむかと已に心を決せしが、さりとては余り本意無し、今夜一夜辛抱して、もし再び昨夜の如く婦人の来ることもあらば度胸を据ゑて其の容貌と其姿態とを觀察せむ、あはよくば勇を震ひて言葉を交し試むべきなり。よしや執着の留りて怨を後世に訴ふるとも、罪なき我を何かせむ、手にも立たざる幻影にさまで恐るゝことはあらじ、と白昼は何人も爾く英雄になるぞかし。逢魔が時の薄暗がりより

漸次しだいに元氣衰へつ、夜に入りて雨の降り出づるに薄ら淋しみくなり増まさりぬ。漫まろに昨夜を憶おもひ起おこして、転うたた恐怖の念に堪たへず、斯くと知らば日の中に辞うちして斯塾を去るべかりし、よしなき好奇心に驅られし身は臆病神の犠牲となれり。

只管ひたすら洋灯ランプを明あかくする、これせめてもの附元氣つけげんき、机の前に端坐して石の如くに身を固め、心細くも唯一人更け行く鐘を数へつ、「早一時はやか」と呟く時、陰々として響き来る、怨むが如き婦人の泣声、柱を回り襖を潜くぐり、壁に浸入しみいる如くなり。

南無三膝なむさんを立直たてなほし、立ちもやらず坐りも果てで、魂宙たましひに浮く処に、沈んで聞こゆる婦人の声、「山田山田」と我が名を呼ぶ、呀あなやと頭かうべを掉ふりかたむ傾け、聞けば聞くほど判然うたがひと疑も無き我が名の山田「山田山田」と呼立つるが、囁く如く近くなり、叫ぶが如くまた遠くなる、南無阿弥陀仏たまたコハ堪らじ。

六

今はハヤ須臾しゆゆの間も忍まび難がたし、臆病者と笑はば笑へ、恥も外聞も要いらばこそ、予は慌あわしたく書齋を出でて奥座敷の方に駈行かけゆきぬ。蓋し松川の臥戸ふしどに身を投じて、味方を得ばやと欲おも

ひしなり。

既にして、松川が閨に到れば、こはそもいかに彼の泣声は正に此室の裡よりす、予は入るにも入られず愕然として襖の外に戦きながら突立てり。

然るに松川は未だ眠らでぞある。鬱し怒れる音調以て、「愛想の尽きた獣だな、汝、苟

くも諸生を教へる松川の妹でありながら、十二にもなつて何の事だ、何うしたらまたそんなに学校が嫌なのだ。これまで幾度と数知れず根競と思つて意見をしても少しも料

簡が直らない、道で遊んで居ては人眼に立つと思ふかして途方も無い学校へ行くてつちやあ家を出て、此頃は庭の竹藪に隠れて居る。此間見着けた時には、腹は立たない

で涙が出たぞ」と切齒をなして憤る。

傍より老いたる婦人の声として「これお長、母様のいふ事も兄様のおつしやる事

もお前は合点が行かないかい、狂気の様な娘を持った私や何といふ因果であらうね。其癖、犬に吠えられた時、お弁当のお菜を遣つて口塞をした氣転なんぞ、満更の馬

鹿でも無いに」と愚痴を零すは母親ならむ。

松川は腹立たしげに「其が馬鹿智慧と謂ふもんだ、馬鹿に小才のあるのはまるっきりの馬鹿よりなほ不可い。彼の時藪の中から引摺出して押入の中へ入れて置くと、死ぬ様な

声を出して泣くもんだから——何時だつけ、むゝ俺が誕生の晩だ——山田に何が泣いてる
 のだと問はれて冷汗を掻いたぞ。貴様が法外な白痴だから己に妹があると謂ふことは人に
 秘して居る位、山田の知らないのも道理だが、これゝで意見をするとは恥かしくつて
 言はれもしない。それでも親の慈悲や兄の情で何うかして学校へも行く様に真人間にして
 やりたいと思へばこそ性懲を附けよう為に、昨夜だつて左様だ、一晚裸にして夜着も
 被せずに打棄つて置いたのだ。すると何うだ、己にお謝罪をすれば未しも可愛気がある
 けれど、いくら寒いたつて余りな、山田の寢床へ潜込みに行きをつた。彼が妖怪と思違
 ひをして居るのも否とは謂はれぬ。妖怪より余程怖い馬鹿だもの、今夜はもう意見をす
 るんぢやあないから謝罪たつて承知はしない、撲殺すのだから左様思へ」と答の音ひ
 うと鳴りて肉を鞭つ響せり。女はひいゝと泣きながら、「姉様謝罪をして頂戴よう、あ
 いたゝ、姉様よう」と、哀なる声にて助を呼ぶ。

今姉さんと呼ばれしは松川の細君なり。「これまで幾度謝罪をして進げましても、お前
 様の料簡が直らないから、もうもう何と謂つたつて御肯入れなさらない、妾が謂つたつて
 所詮駄目です、あゝ、余り酷うございますよ。少し御手柔に遊ばせ、あれゝそれぢ
 やあ真個に死んでしまひますわね、母様、もし旦那つてば、御二人で御折檻なさるから仕

様が無い、えゝ何うせうね、一寸来て下さい」と声震はし「山田さん、山田さん」我を
呼びしは、さては是か。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻64 怪談」作品社

1996（平成8）年6月25日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七巻」岩波書店

1942（昭和17）年10月

※疑問点の確認、修正に当たっては、親本を参照しました。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2006年3月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妖怪年代記

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>